睡蓮

SUIREN

愛知大学
教育研究支援財団
広報誌

09
2022 / 4

巻頭特集［知の対話］

世紀を超えて引き継がれてきた伝統工芸。その技を現代にリメイクし、復活を図る。

有限会社 加藤七宝製作所
代表取締役社長
加藤 芳朗

×

有限会社 エニシング
代表取締役社長
西村 和弘

×

株式会社 山上商店
代表取締役社長
山上 正晃

Professional Eye

人に出会いに行ける「自分の分身」を創りたい。孤独の解消を、分身ロボットで叶える。

株式会社 オリィ研究所 代表取締役所長
吉藤オリィ

AERS

知で活きる人へ。
公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団
AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

Contents

［知の対話］

世紀を超えて引き継がれてきた
伝統工芸。
その技を現代にリメイクし、
復活を図る。

P.03

［Professional Eye］

人に出会いに行ける
「自分の分身」を創りたい。
孤独の解消を、分身ロボットで叶える。

株式会社 オリィ研究所 代表取締役所長
吉藤 オリィ

P.08

［AERSの一年］

【教育活動の支援】

エズラ・ヴォーゲル氏
講演会の追悼出版に寄せて等

P.12

奨励賞・奨学金授与式等

P.15

同窓会会長・後援会会長ごあいさつ

P.18

【寄附金名簿】

P.19

「睡蓮」について　（題字「睡蓮」平松 礼二氏 筆）

愛知大学の教育思想は、国際社会や地域社会のリーダーとなり、世界をダイナミックに動かす人材を育てること。睡蓮の花言葉には、そのような人材に必要な「清純な心」「純粋」「優しさ」「信頼」の意味が含まれており、彼らの未来を支える愛知大学教育研究支援財団の情報発信誌を「睡蓮」と名付けました。

表紙のご紹介

平松 礼二氏 作
「池辺の夢」（2011年）

「睡蓮の花が浮かぶ水面の波は、花の彩りにも飾られながら美しい波紋を描き、見つめる者を夢の世界に誘うかのようである。ゆったりと穏やかな時が流れているような『池辺の夢』と命名された本作品は、モネが創造した水上の花の饗宴、また、それを眺める私たちも、池の上を舞うトンボと共に楽しい夢の世界へと誘われる。」

『フランス芸術文化勲章シュヴァリエ叙勲 受章記念
～日本・フランス美の交叉　平松礼二展～』が開催されます。
場所：松坂屋名古屋店美術画廊　日時：令和4年8月31日～9月6日

ごあいさつ

日頃、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」の活動に、多大なるご理解、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

戦前、中国・上海において、アジアで活躍する国際人を養成し、特に日中関係に貢献する人材の育成を目的に、海外に設けられた日本の高等教育機関であり、最も古い歴史をもつ名門・東亜同文書院大学。敗戦による閉校後、最後の学長であった本間喜一氏らが、「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する国際的教養と視野を持つ人材の育成」を建学の精神とし、新設した大学が「愛知大学」であることから、東亜同文書院は愛知大学の祖といえるでしょう。愛知大学が開学から76年間で15万余の、そして今もグローカルな社会に毎年、優秀な人材を輩出し続けていることは、この精神が脈脈と継承されている証でもあります。また、2011年には社会に求められるより優秀な人材を育成するキャリア形成支援、学生の自立心を高め、積極的なチャレンジを促す課題解決型の正課外プログラム（ラーニングプラス）や海外フィールドスタディなどを拡充するため、名古屋駅前に新キャンパスを開設。東亜同文書院の理念実現のため、日々、愛知大学は進化し続けています。

しかし、時代は猛威を振るう新型コロナウィルスをはじめ、世界を取り巻く情勢の変化や猛スピードで開発されるAIなどの先端技術により、大きな変革の只中にあり、大学と学生を取り巻く環境もめまぐるしく変化し続けています。このような不透明な時代に、愛知大学及び愛知大学生の教育研究活動への支援を行うため、2012年11月公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」が設立されました。

本財団が学術研究助成、課外活動支援、奨学金制度、キャリア形成支援をはじめとする諸事業を積極的に推進することができましたのも、この趣旨にご理解とご賛同をいただいております大学、後援会、同窓会をはじめ、広く一般企業、個人の方からのご厚情の賜物でございます。そこで、賛助会員様をはじめとする皆様に当財団の事業内容をご報告し、成果を共有いただきたく、「睡蓮第9号」を送らせていただきます。ぜひ、ご高覧いただき、これからも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人
愛知大学教育研究支援財団
加藤 満憲

評議員・理事名簿（2022年4月現在）

評議員	地主 道夫	理事	加藤 満憲（理事長）
	近藤 薫		林 昇平（常務理事）
	石川 健次		長谷川 信義
	西原 健二		古川 為之
	八木 好郎		那須 真理子
	岸田 充広		柘植 繁久
	杉本 みさ紀		土井 義昭
	金田 学		武山 卓史
	坂野 嘉昭		平井 治彦
	佐々木 康司		唐 啓山
	砂山 幸雄		中尾 浩
	吉垣 実		近藤 智彦
			功刀 由紀子
		監事	小出 恭己
			南 成

巻頭特集

知の対話

有限会社 加藤七宝製作所
代表取締役社長
加藤 芳朗
KATO Yoshiro

×

有限会社 エニシング
代表取締役社長
西村 和弘
NISHIMURA Kazuhiro

×

株式会社 山上商店
代表取締役社長
山上 正晃
YAMAGAMI Masateru

世紀を超えて引き継がれてきた伝統工芸。その技を現代にリメイクし、復活を図る。

近年、国内だけでなく世界からも注目される日本の職人技や伝統工芸品。一方その生産額は、約40年前をピークに下がり続け、存亡の危機に立たされているものもある。そんな状況下、今なお愛知県で伝統的な技術を継承しモノづくりを続ける西村氏（帆前掛け）、山上氏（有松・鳴海絞り）、加藤氏（尾張七宝）に、各々の取り組みと今後の方向性についてお伺いしました。伝統工芸が持つ可能性と未来をお伝えします。

100年以上続いた至高の技術を途絶えさせないために。

— まずは簡単な自己紹介をお願いします。

西村／江戸時代から始まったと言われる「帆前掛け（ほまえかけ）」を製造し、国内・海外に販売しています。2019年には豊橋に専門の工場を建てました。昔は会社勤めをしていましたが、大学時代にアメリカ留学した経験から日本の魅力を海外に伝えたいと考え独立。漢字プリントTシャツを手掛けていた頃に、帆前掛けに出会いました。世間で見る機会も減っていましたが、これは絶対に海外で評価されるはずだと考え、帆前掛け一筋で20年ほど事業を展開しています。

山上／私は愛知大学卒業後、瀧定名古屋株式会社に入社し、服地を作る部署で勤めていました。父が体調を崩したのを機に、実家の有松の店に戻り、三代目として伝統工芸「有松・鳴海絞り」の絞り染めを手掛けています。有松・鳴海絞りは、8つの工程を経て一つの完成品を作りますが、各工程の職人は街の中で独立しており、私はそのまとめ役として受注から企画、製造管理まで担い、総合プロデュースをしています。

加藤／私は「尾張七宝」という、古代エジプトに起源を持つ工芸品を制作する窯元の三代目です。金属の上にガラス質の釉薬を盛り、焼き付けて作ります。釉薬の成分によって色鮮やかに変色するさまが、金・銀・瑠璃などの色彩豊かな七つの宝石に見立てられ「七宝」と名付けられたと言われております。今でも国が指定する七宝焼きの産地は尾張七宝だけ。残っている窯元は10軒ほど、跡継ぎがいるのはその内2〜3軒ぐらいと、七宝焼きは消滅寸前のところまできているかもしれません。

— 消滅寸前ですか。

加藤／最盛期には窯元も200軒ぐらいあり、仕事も順調だったそうです。しかし今は需要が減り、待っていても電話一本鳴りません。今残っている方たちもほとんどが70〜80代の一人親方で後継者問題が深刻です。私たちのモノづくりが「伝統工芸品」として見ていただいているのは、しっかりとした技術があるから。技術継承が断ち切られれば、七宝焼きの復活はないでしょう。だからまずは、私がその技術をしっかりと継承する。そこで何とか細い道を築き、途切れないようにすれば可能性はあるのではないかと思います。

山上／有松・鳴海絞りの場合、お客さまからのオーダーに対し、その都度その都度、「絵付」や「くくり」、「染色」などの8工程のエキスパートがベストな加工法を考えます。しかし今この体制を維持するのが非常に難しくなっています。時代のせいにしてはいけませんが、土日も休みなく働いていても収入面の壁を乗り越えられず、若い人が辞めていっています。原料や最低賃金も上がる中で、どう加工賃を上げていくか。全工程を一社に集中させ効率化するやり方もありますが、それでは横のつながりがなくなり、技術継承が難しくなる。高い技術あっての有松・鳴海絞りなので、なんとか有松の街全体で仕事を受けるという現体制を維持できないかと、必死に取り組んでいるところです。

西村／私が初めて帆前掛けの製造元に出向き、製造を依頼しようとした時も、当時の最年少の職人さんが既に56歳という状況でした。需要が激減し後数年で店を畳もうとされていて、技術が失われようとしていましたが、私は「帆前掛けは絶対面白い」と思っていたので、逆に銀行から資金を借り入れて事業を始めました。他の多くの工場が廃業しましたが、職人さんから技術を受け継ぎ知恵を絞って生き残った今、強みも生まれ、課題というよりチャンスだと思っています。

長年愛されてきた魅力を信じ、現代風にアレンジする。

— 帆前掛け、有松・鳴海絞り、七宝焼きの魅力をもう少し教えてください。

西村／帆前掛けは帆掛け舟の「帆」に由来し、分厚い生地を指します。江戸時代の絵画によく、藍染めの帆前掛けを身につけた商人が描かれていますが、綿は藍染めすると長持ちします。また、帯で骨盤を締めるので腰を痛みから守ることができ、店の広告宣伝としても機能するなど、多くの利点がありました。今、ラーメン屋さんやパン屋さんに使っていただくと、「骨盤が締まるから立ち仕事にいい」「手についた小麦粉を前掛けではたくだけで落ちる」「熱い鍋を膝に置いても大丈夫」など、作業者目線の実用的メリットを言っていただけます。愛着を持って使っていただいているなと感じています。

山上／有松・鳴海絞りの魅力は、多くの人の手が携わることです。各分野のプロがリレーのように高い技術をつないで一つの製品を完成させるのですが、全て手仕事で非常に幅広い種類のものを作ることができる。アクリル系の素材以外は何でも染められ、様々な形状加工を施せます。有松は知多木綿・三河木綿の産地に近いので浴衣が有名ですが、その技術をさらに

現代風のデザインで新しい姿を見せる「有松・鳴海絞り」。

株式会社 山上商店 代表取締役社長
山上 正晃氏

愛知県生まれ。1992年愛知大学法経学部経済学科卒業後、瀧定名古屋株式会社入社。
1997年から家業である有松鳴海絞の製造卸売り・株式会社山上商店に入社。
産地企業として技術継承や産地のまちづくりに力を入れると同時に2015年からは自社ブランド「cucuri」を立ち上げ、新しい挑戦を続けている。
有松絞商工協同組合理事
愛知県絞工業組合理事

活かすために、綿や麻だけでなく、ウールやポリエステル、レーヨンなど幅広い素材にも応用できる技術を開発しています。有名な海外の展示会でも認知されてきており、海外の方のニーズにも応えたい。ウェディングドレスに絞りを入れるなどご要望は多岐にわたりますが、職人みんなで実現の道を考えられるのが、有松・鳴海絞りの強み。そこに販路拡大のチャンスもあると思います。

有限会社 エニシング 代表取締役社長

西村 和弘氏

広島県生まれ。中央大学在学中に1年間アメリカ留学。
大学卒業後、江崎グリコ株式会社に5年間勤務。
2000年、エニシングを起業。
2005年、日本伝統の仕事着「前掛け」を販売開始、国内外で販路を拡大。
2019年、前掛けの産地、愛知県豊橋に新工場オープン。
現在は、年間10万枚の前掛けの製造販売を行い、イギリス大英博物館やニューヨークMOMAミュージアムなど世界30か国へ販売。2021年、映画007最新作「NO TIME TO DIE」の衣装としても採用され話題に。

豊橋で製造した帆前掛けを、国内・海外各地のお客さんに届けている。

加藤／七宝焼きの魅力は、深みのある色彩と緻密な細工です。皆さんにもご覧いただきたいのが、並河靖之という明治時代の京都の作家の作品。国が外貨獲得のために多くの人材や資金を集中投下していた時代で、それはもう極上の世界観を表現しています。学生時代に初めて鑑賞したのですが、家業としての七宝と明らかに異なると感じました。並河の作品は、言葉に言い尽くせないほど美しく奥深く、「これが本物か」と衝撃を受けたのです。一方、七宝と向き合ったことで、家業の七宝にもまだまだ時代に通用する良さがあると気づきました。並河が築いた七宝の世界を途絶えさせたくないという想いもあり、自分なりに新しい解釈を加えながら、道を切り拓きたいと思っています。

― 今の時代にも受け入れられる可能性が眠っているわけですね。

西村／以前ニューヨークに営業に行った時「この形は何百年も変わっていないのか」と聞かれたことがあります。「変わっていない」と答えると「それが素晴らしい。普遍的な良さがそこにあるはずだから、変えてはいけないと思う」と評価されました。今は伝統と呼ばれていますが、残ってきたものにはそれだけの理由や価値があるはずです。その普遍的な魅力を解明して現代に翻訳し直すことができれば、今の人にも喜んでいただけると考えています。

新しく、泥臭く、挑戦を積み重ねる。

― どんなことに力を入れ、苦労されてきましたか。

山上／有松・鳴海絞りの肝である「くくり」の工程に、一番力を入れています。5年間スパンで外部からお仕事を頂く契約形態ですが、その間は私たちが産地元メーカーとして、職人さん一人ひとりに仕事を出し続けます。メーカーが元気でないと、街にいる職人さんも仕事を続けられません。SNSで発信したり、商売の仕方を変えて利益を捻出するなど、有松のモノづくり体制を維持するために、みんな本当に必死で取り組んでいます。

西村／事業を始めた当初は、大赤字でした。技術を受け継ぐため新しい職人を4人採用しましたが、賃金を支払うためにはある程度の価格を維持しなければならない。百貨店のバイヤーさんに納得していただけるよう、高い技術を持つ人を探し出して教えを請いました。まずは、帆前掛けを織るシャトル織機のメンテナンス。機械の製造は終了していましたが、豊田自動織機さんのOBだった東さんと出会い、徹底的にメンテナンスを教えていただきました。20～30代の若者は「見て覚えろ」ではついていけないです。その点、従業員何千人もの会社で勤めてこられた東さんは「言語化」に長けており、非常に助かりました。前掛けを織る技術も、浜松や蒲郡の熟練の織り職人さんに教えていただき、ついにバイヤーさんから「いいものができましたね。これなら5千円や1万円で売れるね」と言っていただけました。賃金アップのためには、付加価値の高い仕事が必要で、難易度の高いことを自分でもよくやっているなと思います。

加藤／15～16年ぐらい前に大学の仲間とホームページを立ち上げ、百貨店の催事にも出展し始めました。大口の仕事がなくなる危機にも直面しましたが、お声がけくださる企業さんとの出会いもあり新商品開発に着手し、今では何とかその商品が軌道に乗っています。一時は私と家族だけの規模に事業を縮小しましたが、7～8年ぐらい前に1人採用。「あなたは長くやれますか？その意志はどれくらい強いですか？」と継続性を重視しました。今ではうちの戦力として新商品の多くを任せられるようになっています。私が職人と経営者の立場を両立するためには、従業員の採用が不可欠です。新商品を開発しながら従業員を雇う、そしてみんなの給料を上げていくことは至難の業です。西村さんと同じで振り返ってみると、よくやっているなと思います。

西村／もう本当に泥臭いですよね（笑）。国内や海外から注目していただくことはありますが、実際は「日銭をどう稼ぐか」というところで悪戦苦闘しています。

山上／「売る」という意識を持つことで、別の意味で良くなったことがあります。分業制で最終製品を見たことのなかった職人のおばあさんたちが、新しい商品がテレビや雑誌で取り上げられるのを見て喜んでくれるなど、職人のモチベーション向上にもつながっています。

西村／それはありますね。以前、ニューヨークの紀伊国屋で帆前掛けの展示をさせていただいた時、最年長78歳の方を含む3人の職人さんと一緒に現地を訪れました。もう50年以上、前掛けを作ってこられたのに

「現金を払って商品を買う人を目の前で見たのは初めてだ」と話されたのです。どこでだれに使われるかを知らないまま作り続けるのが職人の日常です。しかしゴールを共有すると「ようやく、あなたが目指していることがわかった」と言ってもらえ、より仕事がしやすくなる。ともに高みを目指せるのです。

加藤／七宝もそういう世界でした。売ることは問屋さん任せで、一体どういう人が買い、どう使われているかが見えづらかったですが、今は販売まで責任を持ち始めています。例えば百貨店の催事への出展や、モノづくりイベントに参加して自ら売るということですね。数字を上げること以上に、自分が制作したものにどうリアクションしていただけるかを直接肌で感じながら実験を繰り返し、より良いものづくりにつなげることが大事だと思います。

有限会社 加藤七宝製作所 代表取締役社長

加藤 芳朗氏

愛知県生まれ。2005年愛知県立芸術大学美術学部デザイン科卒業後、25歳より家業である七宝の道へ入り、父・勝己より伝統的技術を学び、2010年加藤七宝製作所3代目代表に就任。
長年培われてきた尾張七宝の技術と知識をベースに、花瓶や額製品など尾張七宝を代表する製品を継承する一方、異業種とのオリジナル商品の開発にも積極的に取り組み、これまでにない新しい「七宝のカタチ」を常に模索し創造する。

高付加価値の尾張七宝を新開発し新たなファンを虜にする。
左が手元供養の「骨壺」、右が底に七宝を仕込んだ「枡」。

出会いが伝統を刺激し、革新を生み出す。

— 取り組みを続ける中で、明るい兆しは見えてきましたか?

山上／流れが変わってきたと感じるのは、街の外の人たちと協力するようになってからです。有松といえば浴衣なので、型紙屋という浴衣の図案師が産地の中で起点となり、重要な役割を担っています。ですが、Tシャツやブラウス、手ぬぐい、帽子など浴衣以外も作り始めてからは、各分野の専門デザイナーと協力するようになりました。「cucuri」というブランドを立ち上げ、アパレルの販売が軌道に乗ってきたのもそんな取り組みから生まれた例です。今の時代はデザイン性が重視されますし、人と同じものを着たがらない方も増えていますので、私たちの絞りの技術がうまく活かせると思います。また、有松は街が一体となって成長してきた歴史があり、建築デザイナーさんと協力して街全体を盛り上げ、少しずつお客さんを呼びこめるようになっています。今後の課題としては、街はどこも絞り屋なので、各店が店ごとの特色を出せるよう、新しい出会いを作っていくことですね。

加藤／私たちも、新しい企業さんと出会い実現した新商品の開発が、ようやく実を結び始めてきました。(ここで、手作りの骨壺など七宝焼きを披露。)こちら、骨壺なのですが、個人でも自由に供養できる時代になり、手元供養のためにご購入いただいています。だいたい5〜8万円ほどです。焼き物なので、100年後もほぼこの状態を維持できるはずです。

西村／素敵ですね。面白い。それに、すごい重量感。お値段も骨壺のように長く使う物でしたら、高くないですね。

加藤／こちらも面白いのですが、高級料亭などの酒の席で、お酒を注いだ底に七宝の鮮やかな世界が映し出される「枡」。一つひとつオーダーを受けて2ヶ月ほどかけて作ります。世の中にない価値を提案する高級枡ブランドさんとの協業により実現した商品で、「本物をとにかく追求しよう」という心意気で製作しています。新商品は一つ開発するのに1年以上かかることも多く、その間の経費も大変なものになりますが、比例するように利益を乗せられるかというと難しく、本当にいい塩梅のところで価格を設定することが課題ですね。最終価格をご覧になって儲かっていると思われることもありますが、その全てが作り手に入るわけではありませんから。

山上／有松・鳴海絞りも同じです。全て手仕事でオーダーに応えていく希少性や、多くの職人が費やした時間や材料、そしてクオリティを考えると、少なくとも今よりは価格を上げざるを得ない。特に絞りは内職の延長のように考えられてきたこともあり、価格が上がりにくいです。その負の連鎖を断ち切らなければ、若手も育たず有松・鳴海絞りの技術が継承できないと考えています。

加藤／本当にその通りです。いかに好循環を生み出すかが未来を拓く鍵であり、絶対に成し遂げなければいけないと思っています。七宝は広く人気を博す商品ではないかもしれないですが、だからこそ、本物を追求する姿勢を応援していただける、コアなファン層を築いていく努力が必要だと思っています。

西村／フランスなど海外で帆前掛けを展示させていただく機会がありますが、人がどっと集まります。ところが必ずしも手塩にかけた商品が売れるわけではなく、ご購入いただけるのはお手頃なものが多いです。だからといって、売れやすいものだけ作るのではいけない。自慢の技術を結集した「旗」になるようなモノづくりも、日々の商売に直結するモノづくりも両方大切。そのメリハリを利かせながら、直販体制の拡充を組み合わせるなどの経営戦略をとっていくことが鍵だと思います。

— 海外の方は、どんな反応を示してくれることが多いですか?

加藤／以前インドの方が、多分これを骨壺と知らずにご購入されたことがあります。

山上／海外の方は自由な発想でインテリアにしますよね。くくりの手ぬぐいをテーブルのセンタークロスにしたり、のれんにしたり、いろんな使い方をしてくれます。

西村／これから海外市場はとても大事になってきます。日本はいずれ人口が8500万人ぐらいになりマーケットが縮小する。しかしEUを見ると、ドイツは8000万人、

イギリスは7000万人、フランスが6500万人と、日本と同規模のマーケットがいくつもあります。海外で今すぐ大きな利益が出るわけではありませんが、将来のために今から取り組まなければと考えています。「フランス人にこんな風に伝えたら、うまくいくな」みたいなことばかり考えていますね。

加藤／ぜひ、西村さんにうちの七宝もプロデュースしていただければ（一同笑）

西村／絶対面白いと思いますよ！

－ これからの展望や課題について教えてください。

山上／有松の技術は確かなので、新しい人と出会うことで、今までにない有松・鳴海絞りを探っていきたいですね。掛け合わせが大事です。その延長上に、技術の継承がありますし、産地を守ることにもつながります。先ほども述べましたが、有松・鳴海絞りは8工程あり職人との間に8回商売があります。その仕組みを維持できるよう、街全体が元気でいられるようにしたいですね。街に人が集まれば今のモノづくりの体制を維持していけますから。

西村／私は「MAEKAKE」を世界共通の言葉にしたいと考えています。「JAPANESE APRON」では私たちが伝えたい「前掛け」の魅力は伝わらない。前掛けはエプロンとは違う良さがあるから「立ち仕事や調理の時に使うといい」「しかもかっこいい」と海外の人が帆前掛け独自の良さを認めてくれるようにしたい。参考にしているのは日本酒です。20年ぐらい前から「獺祭」をはじめ関係者の皆さんが魅力を伝え続けてこられた結果、「JAPANSE ALCOHOL」ではなく「SAKE」として認められようになりました。そのためにもこの1～2年で海外に拠点を作り、情報収集しながらコラボ相手を見つけ、「MAEKAKE」を世界中に広めたいですね。

加藤／西村さんのお話に感化されて、私も海外に行きたくなってきました（笑）。

西村／絶対に行った方がいいと思います。行けば評価してくれる人に絶対に出会えるので、少しずつ道が広がるはずです。

加藤／たしかに今は情報発信すると、国内・海外を問わずある程度リアクションを頂けるようになりました。新商品開発に興味を持ってくださる方も、実感を伴うレベルで現れてきています。少しでも興味を持っていただき「すごくいいね」と言ってくださる方を生み出し、道筋を太くしていくことでしか未来は開けないと思います。資金の問題はありますが、今はいろんな可能性を感じていますので少しずつ七宝の美しさを広めていきたいですね。

まずは何でもやってみる。役割は後でついてくるから。

－ 最後に、睡蓮を読んでいる学生など若い方へのメッセージをお願いします。

加藤／私の立場でおこがましくもありますが、もしも今自分が学生だとしたら、「10年後に何をやっているか」を考えます。私はこの仕事一筋でやってきましたが、人によっては他の仕事に進む方もいらっしゃると思います。何をやってもいい。いつのタイミングかは人それぞれですが、「一生かけてでもやり続けたい」という情熱を傾けられるライフワークを見つけることが重要だと思います。モチベーションや気分が上がる、自分の好きなことにこそエネルギーを惜しみなく注げると思うので、まだ見つかっていない方は、どんどん自分の目で見て、触れて、体験して欲しいですね。それしか方法はないと思います。今の世の中、インターネットで検索すれば「やった」気になれますが、実際に現場まで出向き、自分の目で見る、やってみる。その経験が自分の中に残り、活きてくるのだと思います。

山上／今の学生さんは優秀な方が多いと思います。しっかりと考えて、いろいろな活動に携わろうとされる。有松でも「アリマツーケット」というマルシェがあり、ボランティアとして関わってくださる人たちが増えています。自分をその場に置くことで、何が刺激的かに気づくことができるはずで、最初から全部決める必要はありません。興味を持ったものから始めてみるといいと思います。私は小さい頃から祖母に「後を継げ、後を継げ」と言われる環境で育ちましたが、大学卒業後はサラリーマンとして繊維商社に勤めました。そこで服飾に関わったからこそ、有松の魅力を具体的に知ることができ、家業を継ぐ決断にもつながりました。会社員時代の得意先の方と、有松に戻ってからお仕事の付き合いができたこともあります。始めたことが、いずれどこかでつながっていくと思います。

西村／若い頃に言われて心に残っているのが「苦しい道と楽な道があったら、苦しい道を選ぶと近道だよ」という言葉です。アメリカに留学した時も、起業した時も怖い思いもありました。何が起きるのか想像もできないことばかりですし、起業するには多くの資金も必要になります。本当にやりたいことは、最初は怖いです。でも怖い方へと行動し始め、続けていると、徐々に社会の中での「自分の役割」が見えてきます。私も最初はわかりませんでしたが、後から「自分の役割」が何なのか分かってきました。最初から悩み過ぎず、山上さん、加藤さんがおっしゃる通りまずはやってみると、後々道が開けてくるのではないかと思います。やる前からでは絶対わかりませんから。

人に出会いに行ける「自分の分身」を創りたい。孤独の解消を、分身ロボットで叶える。

featuring

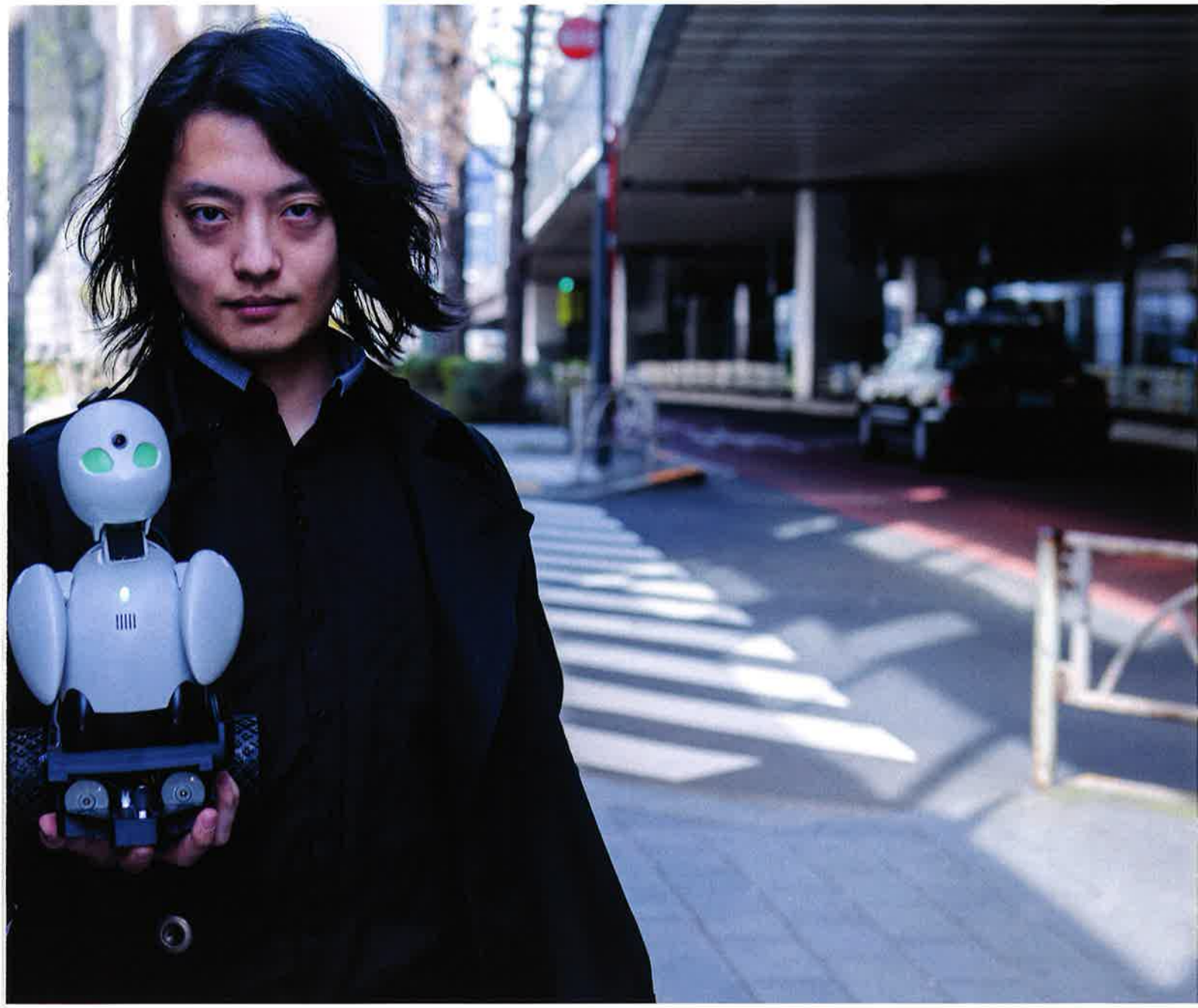
株式会社 オリィ研究所 代表取締役所長

吉藤 オリィ

よしふじ おりぃ

奈良県生まれ。高校時代に電動車椅子の新機構の発明に関わり、2004年の高校生科学技術チャレンジ(JSEC)で文部科学大臣賞を受賞。翌年にアメリカで開催されたインテル国際学生科学技術フェア(ISEF)でグランドアワード3位に。高専で人工知能を学んだ後、早稲田大学創造理工学部へ進学。分身コミュニケーションロボット「OriHime」を開発(この功績から2012年に「人間力大賞」を受賞)し、株式会社オリィ研究所を設立。「ベッドの上にいながら、会いたい人と会い、社会に参加できる未来の実現」を理念に、開発を進めている。2016年、Forbes Asia 30 Under 30 Industry, Manufacturing & Energy部門 選出。

寝たきりになってしまった障害者や外出困難者などの「孤独」の問題に、遠隔操作で動かせる「分身ロボット」の開発というアイデアで挑む吉藤さん。たとえ外出が困難でも、「自分の分身」がいれば、それを通して人と出会い、孤独を解消できると話す。小・中学校で不登校になりながらも、出会いを通して人生を前向きに捉え直すことができた吉藤さん。だからこそ「孤独」の問題を具体的に解決できるのかもしれない。



人との出会いが自分を変えた。
進むべき道がはっきり見えた。

「小さい頃からこだわりが強すぎて、コミュニケーションが苦手でした。」

病気で2週間学校を休んだのを機に小学5年から不登校になり、家族や友人にも負い目を感じて強い孤独感・無力感を感じるようになったという吉藤さん。

「当時は将来のことを聞かれても、人生右肩下がりの状態。未来に悪いイメージしか持てなかった。本当に辛くて、生きるための理由を毎日探していました。」

そんな吉藤さんに何か一つでもきっかけをと、母親がロボットづくりのコンテストに応募。昔から折り紙などモノづくりが好きだった少年は優勝、翌年も同じ大会で準優勝した。

「そこで出会ったロボット開発者の久保田憲司先生に憧れ、弟子入りを希望して、先生が在籍する奈良県立王子工業高校に入学しました。高校では『傾かない車いす』の製作に没頭。高校生科学技術チャレンジ(JSEC)に出場して優勝し、歴史あるインテル国際科学技術フェア(ISEF)では世界3位になりました。そこでまた、すごい人たちに出会えました。」

中でも、とある海外高校生の言葉に惹かれたという。
「『俺はこの研究をするために、この世に生を受けたんだ。』って目を輝かせて言うのです。その考え方っていいなと思いました。自分がなぜ生きるのかに、いちいち疑問を持たなくていいですから。」
不登校時代から孤独を感じ、自分が生きる理由を問い続けてきた吉藤さん。
「孤独は、寝たきりの障害者や高齢者にとっても大きな問題。人によって効果に差がある精神的なサポートではなく、多くの人に適応可能なツールで解決したいと思うようになりました。だから私は人生を懸けて、孤独をなくすための福祉機器を開発しようと決めました。」

外に出て人に出会い、分かち合うことの素晴らしさ。

孤独の解消をロボットで叶えようと決めた吉藤さん。カメラやマイク、スピーカーを搭載し、手や首が動く分身ロボット「OriHime」を開発する。離れていても自分の分身ロボットを通して、相手と会話を楽しみリアクションするなど、あたかもその場にいるようなコミュニケーションがとれるロボットだ。でもなぜAI(人工知能)全盛の時代に、分身ロボットなのか?
「私を孤独から救ってくれたのは、結局人でした。外に出て人と出会えば、憧れが生まれ、前向きになれる。たとえ外出が難しくても自分の『分身』を移動させることができれば、人と出会い、希望を持てるようになるのです。」
電話やオンラインビデオ通話で、人とつながるのではダメなのか?
「思い出に残る場所、憧れる場所は、ほとんどリアルな場にあります。外に出て、誰かと一緒にいて、ムダとも思えるような共通の体験を重ねながら、関係性を育むのが人間です。移動のコストをかけず物理的に離れたままでは、目的や必要性のある話ばかりになり、関係性の構築が難しくなるのではないでしょうか。サークルの活動後や仕事後の飲み会が人間関係を築くのに大いに役立つのは、『目的の中の非目的。必要の中の不必要。』が重要だから。オンライン飲みのブームがすぐ去ったのも、結局体は別々でリアルな場を共有していないことが大きかったのではないかと思います。」

同じ場所を共有することは、それだけで大きな価値があり、新しい可能性をもたらしてくれる。AIロボットでもオンラインビデオでもなく、分身ロボットでのコミュニケーションにこだわる理由がそこにある。

分身ロボットカフェの各テーブルには、おしゃれな衣装のオリヒメが待っている

店内様子

店内で集う人々

決して他人事ではない問題。孤独に苦しむ人に寄り添う。

開発した「OriHime」の有用性を確信させてくれたのが、幼い頃の交通事故が原因で寝たきりの生活を送っていた故・番田雄太さん。吉藤さんと出会いオリィ研究所に入社し、吉藤さんの右腕として活躍。2人はいつしか「親友」と呼べる仲になった。
「彼は、私が作った『OriHime』で人と接し仕事を始めてから、明らかに人生が変わりました。障害者年金ではない、自分で稼いだお金の価値を噛みしめ、それを人のために使う喜びも感じるようになっていました。」
自分の作る分身ロボットが、寝たきりの人に希望を与えられることを肌で感じた吉藤さんは、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の患者さんにも積極的に会いに行く。ALSはある日突然体が動かなくなる病気で、呼吸器を装着すれば延命できるが、世界では約9割の人がその選択をせず亡くなっている。
「患者さんの多くがご家族の負担を考え、呼吸器をつけず死を選ばれています。」
吉藤さんは、呼吸器を着けて生きると決断したALS患者の藤澤義之さんと出会う。
「藤澤さんは、ヘルパーさんなど周囲をすごく大事にされる方。ご本人は体を動かせなくても、お人柄に惹かれて人が集まってくるのです。一方で世の中には、定年退職後急に孤独になってしまう方もいる。その違いはどこにあるのかと深く考えるようになりました。」
人とどう付き合い、社会にどう参加するかは、寝たきりの患者さんだけの問題ではない。寿命を全うする前に健康に支障をきたし、外出の機会が減って孤独になってしまう人もいる。認知症や鬱にもつながってしまう孤独は、決して他人事ではない。

吉藤さんが今取り組んでいるのが「分身ロボットカフェ」の運営。働く意欲はあるのに働けない人が、遠隔で分身ロボットを操作し、飲み物を運んだり、客とおしゃべりするなど、「接客」の仕事ができる場を提供している。

「カフェで働くのは、一つのきっかけです。人と出会い役割を持つことで誰かに喜ばれ、必要とされ、自分を再発見できる。次のステップに進むことができる。自分らしく生きるためには、まずは自分がしたいことができないといけないですからね。」

また吉藤さんは、人と関係性を築く「接客」の仕事は、今後AIロボットが普及しても奪われないはずだと話す。

「コンビニに行くなら、わざわざ遠い方を選ぶことはないでしょう。しかし美容院やスナックなら、距離よりお店の人が大事。『関係性』が成立してこそのお仕事はAIにはできず、人間にしかできないと思うのです。」

分身ロボットを活用した接客業には、大きな可能性が眠っている。

エゴこそ物の上手なれ。出会いを増やし、夢中になれることを発見してほしい。

自ら課題を設定し、答えを導き出してきた吉藤さんにとって「学び」とは何だろうか。

「試行錯誤を繰り返す中で、学びは自ずと身につくものです。だからまずは、自分が『夢中』になれること、強い『エゴ』を感じられることを見つけましょう。自分の中にないものを探しても見つかりませんよ。お金をもらえなくても、むしろ払ってでもやりたいと思えることがある人が、これからの時代は強いです。」

学びはやりたいことを実現するための手段に過ぎない。一番大切なのは、自分がどうしてもやりたいことを見つけることだと言う。

最後に、今の若い人へのメッセージを聞いた。

「人は誰かと出会い、その関係性の中で自分のパーソナリティを築いていきます。だから人に憧れを持つことや、『この人と一緒にいたい』と思える経験を増やしてください。今風に言うと、『推し』をつくること。推しに興味を持つと推しや周りの人にも興味の幅が広がり、自分の世界も広がりますから。そして、素敵だなと思う大人に自ら会いに行ってください。大人たちも意外と若者との出会いを求めていて、喜んでくれるはず。大人を凄い人間として崇める必要はありません。もし合わなかったとしても、また次の出会いがあります。あの人に出会えたから今の自分があるという経験が、あなたを成長させてくれるはずです。」

分身ロボットカフェ DAWN ver.β

株式会社オリィ研究所が運営する、2021年6月に東京・日本橋にオープンしたカフェ。外出困難者である従業員が、分身ロボット『OriHime』と『OriHime-D』を遠隔操作しお客様にサービスを提供するという、職業支援も兼ねた新しい試みです。株式会社オリィ研究所は、テクノロジーによって人々の新しい社会参加の形を実現させるために、コミュニケーションロボットを開発しています。少し先の未来を体験しに、訪れてみませんか?

ACCESS

〒103-0023
東京都中央区日本橋本町3-8-3
日本橋ライフサイエンスビルディング3 1F

［最寄駅］
- 東京メトロ日比谷線 ： 小伝馬町駅 徒歩4分
- JR総武線 ： 新日本橋駅 5番出口すぐ
- 東京メトロ銀座線 ： 三越前駅 徒歩7分
- JR山手線 ： 神田駅 徒歩10分

遠隔操作でお客様をお出迎え。

カフェ外観

AERSの一年
（アース）

明日の地域社会に貢献する人材を育成する
愛知大学教育研究支援財団（愛称AERS（アース））の一年を振り返りました。

［AERS（アース）とは：AICHIUNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION（愛知大学教育研究支援財団）の頭文字を合わせた愛称です。AERS（アース）は、より良い明日（アース）に向かおうと言う思いも込められています。］

教育活動の支援

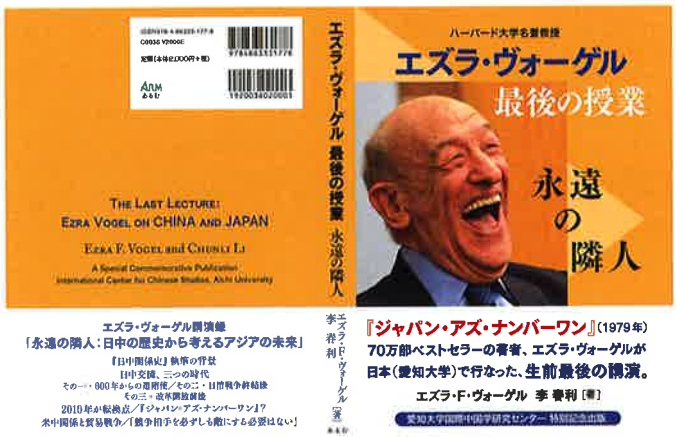
エズラ・ヴォーゲル氏講演会の追悼出版に寄せて

愛知大学
国際中国学研究センター所長・
経済学部教授
李 春利

2020年12月に他界されたハーバード大学名誉教授エズラ・ヴォーゲル先生(Ezra・F・Vogel/中国名：傅高義)を追悼して、愛知大学国際中国学研究センター特別記念出版として『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業―永遠の隣人―』(エズラ・F・ヴォーゲル、李春利／著、あるむ出版)と題した本を出版しました。この本は、ヴォーゲル先生が生前日本で行った最後の講演を記念して、その講演録を中心に、筆者がまとめた解説文や追悼文などを加えて収録した1冊です。ヴォーゲル先生は日本と中国研究の世界的権威であり、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』や『現代中国の父鄧小平』など、ベストセラーを数多く執筆されました。

ヴォーゲル先生には2019年11月23日に名古屋で開催した愛知大学主催の「中国公開講座」における「永遠の隣人―日中の歴史から考えるアジアの未来」と題した講演会には約1000人が参加しました。今回の訪問は、ヴォーゲル先生が著書『日中関係史』の日本語版の出版に合わせて来日された際に実現できたものです。

ヴォーゲル先生の本の中には、「近衛篤麿と“アジア人のための



アジア” 外交」と題した1節があります。約10ページ以上割いて、愛知大学の前身校である東亜同文書院の創立者近衛篤麿や東亜同文会、また、清朝両江総督劉坤一の支持による同文書院の創設や書院関係者による愛知大学の創設なども紹介されています。ご講演の冒頭で次のように切り出しました。

「最近の7年間、私は日本と中国の歴史を勉強しております。その中には、愛知大学と戦前の東亜同文書院という興味深い関係もありました。愛知大学は、戦後の日本と中国の関係において非常に重要な役割を担ってきたことから、本書『日中関係史』が出版される際には、やはり愛知大学を訪ねたいと思っていました。というのも、日本全国で中国をテーマとした学部、つまり、現代中国学部を有するのは愛知大学しかなく、日本と中国の関係に大変密接であることから、是非とも私はここへ来たかったのです。」

くしくも愛知大学での講演はヴォーゲル先生が生前日本での最後の講演会となりました。それを記念して上述の本を出版したわけです。今回の出版は、愛知大学教育研究支援財団の助成を受けており、ここで心より厚く御礼申し上げます。

私とヴォーゲル先生の交流は、実に1996年に東京の国際文化会館で開催された日米中の国際シンポジウムでの初対面にさかのぼります。私は、ヴォーゲル先生の名著『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を読んで日本に興味を持ち、その後、日本留学を経て、愛知大学で教鞭を取るようになりました。また、2004年と2018年に、私は1年間ずつバーバード大学で招聘研究員とフェローとして研究する機会を持ったことで縁が深まりました。2019年5月にバーバード大学アジアセンターが主催してくれた私の講演会では、ヴォーゲル先生に司会役を務めていただきました。ご自宅に招かれて討論したこともあります。

心よりエズラ・ヴォーゲル先生のご冥福をお祈りいたします。合掌。

教育活動の支援

車椅子バスケットボール・カナダ代表チームと交流

名古屋学生課（兼ボランティアセンター）（2021年度時）
岩田 正人

東京パラリンピックの開幕を前に、2021年8月14日から20日にかけて、車椅子バスケットボール・カナダ代表チーム約40人が、名古屋市内で事前合宿し、合宿期間中に本学の体育館で練習しました。また、練習期間中には、新型コロナウイルス感染症対策に細心の注意を払いつつ、本学学生とできる限りの交流を行いました。当初、学内関係者からは、コロナ禍において、リスクを懸念する声も少なからず上がりましたが、ボランティアセンターでは、「リスクを恐れたら、学生は何も得られない」と考え、受入れ・対面での交流会実施を決断しました。ボランティアセンターから本学クラブ・サークルに声を掛け、主に2つの交流会を実施しました。コロナ禍により、活動・活躍の場を失いつつあった学生達は、快く引き受けてくれました。交流会の内容は、①「チアリーディング部」から応援のダンスの披露、②「創作画研究会」から選手達の似顔絵入りうちわのプレゼント、これらを通じて、心からのエールを送りました。とりわけ、チアリーディング部は、部員約40人が、屋外で、選手達と十メートルほどの距離を空けて対面し、マスクを着用の上、応援のダンスを精一杯に披露しました。学生からは、一同に、「貴重な体験になった」、「コロナ禍において、ほとんどのイベントが中止になる中、対面で交流を図ることができて、本当によかった」などの声が聞かれました。

應援團チアリーディング部 演武

創作画研究会作成　似顔絵うちわ（一部）

2年以上に及ぶ未曽有のコロナ禍は、学生達から、様々な機会を奪いました。ボランティアセンターの職員として、大学とは、学業だけではなく、社会に出る前の貴重な経験を多岐に渡り、積める場であると感じています。また、今回の車椅子バスケットボール・カナダ代表チームへのおもてなしは、学生にとっては、障害者スポーツや多様性への理解を深めるためにも、絶好の場になったと思います。これらの経験を通して、本学学生がいかなる逆境にも負けず、前向きに取り組める力強さを学び取ってくれたなら、望外の喜びです。

日中国交正常化50周年記念シンポジウム
「『1972年体制』の地殻変動 ―新時代の日中関係への視座―」

愛知大学国際問題研究所運営委員
加治 宏基

2022年9月には、日中国交樹立から50周年を迎えます。平和友好を基調とする日中関係の枠組は「1972年体制」とも称されますが、中国の国際プレゼンスが高まるなかで、また数年来の米中対立という文脈において、私たちは東アジアの動態をどのように捉え、今後のあるべき関係をいかに構想すればよいでしょうか。

こうした問題関心に応えるべく、愛知大学国際問題研究所は2022年3月2日（水）、日中国交正常化50周年記念シンポジウム「『1972年体制』の地殻変動 ―新時代の日中関係への視座―」（共催：愛知大学国際研究機構、後援：（公財）愛知大学教育研究支援財団、（公財）大幸財団）を開催しました。第一部の高原明生教授（現代中国政治・東京大学）による基調講演「日中関係の来し方と行く末 ―東アジアの平和のゆくえ―」では、1972年体制の本質が柔軟な連帯と強靭な関係性にあること、そして胡錦涛政権と習近平政権に見られる対外的自己主張の連続性が指摘されました。

第二部のパネルディスカッションでは、唐亮教授（現代中国政治・早稲田大学）、南基正教授（日韓関係・ソウル大学）、竹中千春教授（インド／南アジア政治・立教大学）、砂山幸雄教授（近現代中国政治／日中関係・愛知大学）の各専門家より、日中関係をめぐる重要な視座が提起されました。特に、日米を中心とした「自由で開かれたインド太平洋」戦略と中国が展開する「一帯一路」構想が、ともすれば対峙しかねない構図をなすアジア情勢において、多元的レベルでの対話を通じて緊張緩和の紛争処理メカニズムを機能させる重要性が強調されました。

ロシアによるウクライナ侵攻という緊急事態に際して、中国の対応が注目されます。国内外合わせて約140名もの多くの方々に参加いただき、第三部では世界動向と東アジア、日本を引き付けた疑問・関心に、登壇者からの応答の時間も設定しました。日中、米中の国交樹立の契機となった1971年の第31回世界卓球選手権の開催地・名古屋から、時機を得た学術活動を実施・発信することができました。最後となりましたが、助成をいただきました愛知大学教育研究支援財団に、心より感謝申し上げます。

オンラインで基調講演を行う高原教授

海外活動の支援

江蘇杯中国語スピーチコンテスト　2021年12月18日オンライン開催

江蘇杯中国語スピーチコンテストは、中国屈指の名門大学・南京大学と、江蘇国際文化交流センター（南京市）、本学の3機関による共催で、今回が7回目となります。同コンテストは米国、東南アジア諸国でも開催されてきました。2020年からコロナ禍の影響により、オンラインで実施しています。今回、東海・北陸地区の高校生、中部・東海地区の大学、南京大学の一部提携大学に在籍する大学生からの応募者数は、過去最多の89名になりました。南京大学留学等の充実した副賞が本大会の特徴です。

中国語スピーチコンテストに参加し得たこと［スピーチ本文（日本語訳）］

現代中国学部1年（2021年度時）
大窪 綾香（特等賞）

高校1年生から中国語を勉強していますが、学習内容が増えるにつれ、中国語にますます魅了されました。その後、国際交流や中国語スピーチコンテストに取り組むクラブに参加でき、とても幸運でした。

中国語クラブでたくさんの素晴らしい時間を過ごしましたが、一番印象に残ったのはスピーチコンテストに参加したことです。高校2年生の時、西日本地域の代表として、中国河南省鄭州で開催された中国スピーチ世界選手権に参加しました。でも中国語は1年半しか勉強しておらず、話すのも苦手でしたが、自分のスキルを使って、知っている言葉を大胆に使って文章を作り、身振りや表現でアイデアを表現することができたので、参加資格がもらえました。

この集まりと世界中の中国語愛好家との交流により、私の視野が広がり、多くのことを学ぶことができました。多くの人のスピーチ、質疑応答、パフォーマンスはレベルが高く、私も彼らから学びました。世界はとても大きく、世界には驚くべきことがたくさんあります。

一番驚いたのはミャンマーのイルミネーションです。イルミネーションに関しては色とりどりの光を思い浮かべますが、ミャンマーのキャンドルを使っているものもあります。キャンドルと言えば、色が少ないと思うので少し悲しくなります。しかし、ミャンマーの人々はろうそくの明かりを使って広場を照らしており、ろうそくの明かりの独特の暖かさ、優しさを光に置き換えることはできません。

アルメニアのネックレスも羨ましいです。木を使って特定の意味を表す形を作り、ロープをかけて愛する人に贈るというのがあります。この木製ネックレスはそれほど高価ではありませんが、それは深い愛情を表現することができます。

中国語スピーチ世界大会でたくさんの友達ができました。大会からもう3年になりますが、各国の選手との友情は続いています。彼らは今みな高校を卒業し、好きなことをやっていて、多くはまだ中国語を一生懸命学んでいます。私たちはしばしばチャットで、新型コロナウイルスや変異ウイルス、そして生活の変化など、多くの共通の話題を話しています。インターネットを通じて、人々は世界中のあらゆる種類の情報を入手できますが、一部の情報は誤りです。そして、世界中の友達から聞いたことは、とても現実的な世界だと思います。

私の理想は、中国語を使った仕事を見つけて、この仕事が世界と調和することを願っています。この理想は、私が参加した中国語のスピーチコンテストから生まれました。この理想を実現するために、私は中国に留学し、中国語をどんどん学びたいと思っています。

「江蘇杯コンテストに参加しての思い」や「普段の中国語の勉強の様子」等［参加しての感想］

現代中国学部1年（2021年度時）
磯村 美葵（1等賞）

私は江蘇杯に参加して表現の多様性や発音について学びました。練習にあたって大学の先輩や先生方にとてもお世話になりました。多くの方に自分の発音や抑揚を聞いていただいて助言をいただきましたが、どの方も助言の内容が異なっていました。「オーバーなくらいに抑揚をつけたほうが良い」という方もいれば、「もっと抑えめに聞き取りやすく表現したほうがいい」と言ってくださる方もいらっしゃいました。はじめは真逆なことを言われて困惑していましたが、朗読の表現や文章の解釈は多種多様であるということを知りました。最終的に、私はいただいた助言を参考にしながらも“自分の理想とする抑揚”を見つけて発表をしました。江蘇杯本番を迎え、多くの方の朗読を聞きましたが、それぞれ表現が違っていて面白いと感じました。また発音に関しては、練習を重ねるごとに上手になって行きましたが、「an」と「ang」の発音にはぎりぎりまで苦戦していました。「ang」は舌を上あごにつけないことで発音ができると発見しましたが、突然「ang」が出てきたときには、まだとまどいます。これからもこのように慣れない発音には苦戦しそうです。

今では江蘇杯に参加したことで以前よりも自然に発音ができるようになりましたし、1等賞という結果を残せたことで自信もつき、中国語がより好きになりました。練習期間につらいことはたくさんありましたが、今では参加してよかったと心の底から思います。これからも中国語の学習に励んでいきたいです。

教育活動の支援

「奨励賞」授与式

※2022年3月5日に予定していた式は、新型コロナウイルス感染症に関するまん延防止等重点措置期間となったため、安全面の配慮から中止し、栄えある賞を受賞された皆様には、別途、賞状・記念品を送付しました。

社会・文化・学術・芸術・スポーツ・社会貢献などの分野において活躍し、成果をおさめた個人及び団体に対し、その栄誉を称え、一層の励みとすることを目的に顕彰を実施しました。後援会最優秀奨励賞では、2021年度全日本学生柔道体重別選手権大会で準優勝に輝いた杉浦冬唯君(同窓会奨励賞最優秀賞も受賞)、第44回全日本学生軟式野球選抜大会で最優秀投手賞に輝いた板垣周太郎君をはじめ、各種競技大会等で活躍した多くの学生、部活動団体を表彰しました。また、同窓会奨励賞では、各分野で活躍されている下記の方々が受賞されました。東北楽天ゴールデンイーグルスからドラフト2位指名という快挙を成し遂げられた安田悠馬君が優秀賞を受賞されました。並外れたパワー、豪快なスイングで、すでに楽天チームにおいて大活躍中で今後が楽しみです。

2021年度全日本学生柔道 体重別選手権大会準優勝［後援会最優秀奨励賞］

名古屋校舎体育会柔道部 経済学部4年（2021年度時）
杉浦 冬唯

この度は「最優秀奨励賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。卒業を迎えたいま、愛知大学に入学して本当に良かったと思っています。そして、愛知大学の柔道部で4年間を過ごせたことを心より幸せに思います。

私は「常に1番であること」を大切に4年間稽古に励んできました。大学入学までの実績では、個人での全国大会出場経験がないなど不安を持っていたのは事実です。しかし、大学での稽古量や質では他の誰よりもやったという自負がありました。結果として、それが試合に臨む際の自信に繋がり、強豪校の選手を相手に堂々と試合ができたと感じます。

コロナ禍で稽古が全くできない時期もありましたが、なんとか耐え抜いてこのような結果を収められたことは本当に良かったと思います。しかし、まだまだ納得のいく結果ではありません。今後も社会人として柔道を続けます。一歩届かなかった「日本一」というタイトルを何が何でも掴み取ります。

柔道ができる環境、そしてこれまでお世話になった方々への感謝の気持ちを忘れず、これまで以上に日々精進して参りますので、今後とも応援のほど、よろしくお願い致します。

東北楽天ゴールデンイーグルスから2位指名［同窓会奨励賞優秀賞］

地域政策学部4年（2021年度時）
安田 悠馬

この度は、同窓会奨励賞を授与していただきまして誠にありがとうございます。大変光栄に思うと同時に、この賞は皆様のお陰でいただけた賞だと強く感謝をしております。コロナ禍で十分な練習や試合ができなくなり消化不良な部分もありましたが、チームメイトと悔いなく最後まで楽しむことができました。4年間での一番の成長は、自主性を重んじることで得た「人間力」です。一部リーグ復帰の目標を果たすことができず残念ではありましたが、個人的には東北楽天ゴールデンイーグルスから2位指名されてとても光栄に思っております。感謝するとともに身の引き締まる思いです。今後は、チームメイトやファンから愛され、勝利に貢献できるよう精一杯努力して参りますので、ご声援のほどよろしくお願いいたします。この度は、本当にありがとうございました。

©Rakuten Eagles

後援会奨励賞	スポーツの部〈団体〉	最優秀奨励賞（軟式野球部）1団体　優秀奨励賞 1団体　奨励賞 10団体
	スポーツの部〈個人〉	最優秀奨励賞（柔道部・杉浦冬唯、軟式野球部・板垣周太郎）2名　優秀奨励賞 17名　奨励賞 28名
	マネージャーの部	奨励賞 2名

同窓会奨励賞	〈個人〉最優秀賞	杉浦冬唯氏（2021年度全日本学生柔道体重別選手権大会66kg級準優勝）
	優秀賞	安田悠馬氏（東北楽天ゴールデンイーグルスからドラフト2位指名） 平野等氏（柔道を通じた国際協力関係の構築と柔道競技の普及・発展並びに本学柔道部への多大なる尽力） 李春利氏（エズラ・ヴォーゲル氏との共同研究と日中親交に寄与）
	功労賞	吉田敏氏（同窓会活動「読書会」に20年間継続された地道な貢献） 木下貴雄氏（日中友好交流・中国残留孤児（帰国者）生活支援・在住外国人高齢者介護支援）
	〈団体〉優秀賞	為廣ゼミナール「シンメトリー」（名古屋マーケティング・インカレ優勝）
	クラブ愛知賞（社会貢献の部）	エコビジネス研究会（ecoB・G）（ペットボトルキャップ回収）

同窓会資格試験合格者奨励賞	〈司法試験〉廣浦眞澄氏、六鹿竜輝氏　〈公認会計士〉魚住知加氏　〈司法書士試験〉伊藤義一氏、佐橋貴光氏、片桐隆司氏 〈税理士試験〉長谷川友梨氏、西川将典氏

教育活動の支援

「奨学金」授与式

2021年12月11日　愛知大学名古屋キャンパスで実施

名古屋キャンパス講義棟4階L407教室において、2021年度奨学金授与式を開催しました。愛知県独自の警戒領域での新型コロナウィルス感染防止対策の取組により、新規陽性者数、入院患者数などが11月初め頃より減少し、感染防止対策の更なる緩和が発表されたことから、マスク着用、リモート着席等、十分に感染対策を図った上で対面での開催ができました。優秀な学生を表彰するとともに、また、学生が経済的理由で勉学をあきらめることなく、希望ある未来を目指してもらうことを願い、合計78名の学生に奨学金を授与しました。式では、加藤満憲理事長、武山卓史後援会会長の挨拶、川井伸一学長から激励の言葉をいただきました。また、受賞した学生を代表して、各分野の3名から感謝の言葉や勉学に励む日々の努力、目指している夢など、抱負が語られました。

奨学金給付実績

一般給付奨学金	41名
知を愛する奨学金	5名
法科大学院特別奨学金	3名
後援会学業奨励金	22名
法科大学院入学時給付奨学金	5名
後援会私費外国人留学生給付奨学金	2名

法科大学院特別奨学生

法科大学院3年（2021年度時）
川喜田 桃子

この度は法科大学院特別奨学生に御採用いただきありがとうございます。法科大学院3年の川喜田桃子です。

法科大学院での勉強は一般的な大学院での研究とは異なり、修了後の司法試験合格を目指したいわゆる受験勉強になります。したがって、自分の興味のある分野だけではなく、試験科目である必修7科目と選択科目の計8科目を学ぶことになります。公法系・刑事系・民事系とあらゆる科目を平行して勉強していくことは大変だと感じることもありますが、様々な分野を半ば強制的に学ぶことで科目ごとの特徴や他の科目との相関性に気づくことができ、これは法科大学院ならではの楽しさなのかと思います。私たちの学ぶ法律は、紙に印鑑を押す、自動車は人がアクセル・ブレーキを操作するといった社会を想定して作られています。しかし、昨今のコロナウイルスの流行を契機とした業務等のデジタル化や、自動運転技術をはじめとした急速な科学技術の発展により、法が想定する社会と実社会に齟齬が生じているように思います。このような社会の変化の急速さや変化の予測が困難であることからすれば、すべてを法改正により対応することは困難であるように思います。そこで、既存の法律を用いた対応が必要であり、社会の実情に応じた機動的な対応をしていくことができるのが弁護士等の法律実務家ではないでしょうか。技術は私たちの暮らしをより豊かにするためのものですから、このような社会の変化・技術の進歩に対応できる弁護士になって、よりよい社会の実現に貢献したいと思います。そのためには司法試験の合格が必要ですが、その前提としてまずは来月末の修了試験に通過する必要があります。大学院修了・司法試験合格に向けて、これからも頑張りたいと思います。

知を愛する奨学生

経営学部1年（2021年度時）
田代 翔大

経営学部1年の田代翔大です。本日はこのような場でお話をさせていただくことを光栄に思います。まずは、このたび、「知を愛する奨学生」に採用していただいてありがとうございます。私の地元は山梨県にあり、この大学に入学してすぐの時は、地元が離れていることやコロナウィルスの拡大などが合わさって、慣れないことや不安が多い日々でした。私自身、粗忽なところがあり、一度に多くのことをこなすことが得意ではありません。しかし愛知大学では親身になって教えてくださる先生や頼りになる先輩、友人に恵まれ、充実した大学生活を送ることができています。私はこの大学で資格取得を目指し、学習に励みたいと思っています。試験が近づくと、授業や資格の勉強など多くの学習が立て込むため、勉強に集中できる愛知大学の整った環境は非常にありがたいといつも実感しています。まずは目標である簿記の資格取得を目指し、学習に励んでいきたいと思います。また、授業や資格の勉強、アルバイトなど様々な物事をこなし、何をするべきか的確に判断できるようになることもこの大学生活で身に付けていきたいと考えています。この機会を機に、恵まれた状況に感謝しつつ、自分をさらに成長させていきたいと思います。

教育活動の支援

後援会私費外国人留学生給付奨学生

文学部4年（2021年度時）
章　昊

この度は、愛知大学教育研究会支援財団「後援会私費外国人留学生給付奨学金」に採用いただき、誠にありがとうございます。2018年4月、大学に入学して4年目になりました。今年の4月から大学院の進学準備を本格的に始め、また卒業に向けて卒業論文の作成を進めております。最初大学に入る時、日本の大学生活はどのような感じか、先生が言うことを理解できるか、全然分からなくて緊張感がいっぱいでした。今はもう、完全に日本の大学生活に慣れました。この4年間私は授業に参加しながらたくさんの友達ができ、毎日友達と一緒に興味深い授業に参加しました。いろんな友達の影響で日本文化への理解がより深くなり、自分自身が日本に溶け込んでいることを感じています。今は異文化交流する時も私は柔軟性を持ってスムーズに対応できる自信があります。

今年奨学金を頂けることにとても感謝しています。今年もコロナの影響が続いています。4年生になり卒業論文の研究と大学院試験の勉強が重なり、アルバイトの時間も大きく減り、生活費に充てることが難しい状況にありました。そのような中で奨学金をご支援いただいたことで、余裕をもって勉強に専念できるようになりました。また、奨学生に採用していただいたことで、経済的な負担も減り、時間的な余裕を持てるようになったので、卒業論文の研究も順調に進んでおります。今現在、論文の完成が近付いており、自分が納得できる卒業論文を完成させたいと思っております。

残り少ない大学生活に悔いを残さず努力し、また、友人との時間も大切にして過ごしたいです。また、愛知大学の卒業生として、これから明るく元気に何事も一生懸命に取り組み、恥ずかしくない立派な人になれるように頑張ります。

最後に、ご支援いただいている全ての方に重ねてお礼を申し上げます。

キャリア教育事業助成金

・産学官連携キャリア育成プログラム、学生に向けた告知チャンネルの追加等の学生のキャリア育成にかかる事業を支援しています。

知のミーティング、海外研究実習助成、教育活動助成、課外活動特別奨励などの事業

・講演会の開催等への助成、学生が海外を訪問し社会の実情を研究する海外フィールドワークや海外インターンシップ、学生の部活動における各種競技大会へ参加する経費等の助成などを実施しています。

「感謝状」贈呈式

2021年12月11日愛知大学名古屋校舎で実施

公益財団法人愛知大学教育研究支援財団は、発足以来、同窓会及び後援会からの寄付に加え、企業や個人会員の皆様からの寄付を始めとするさまざまな形でのお力添えにより、事業を実施しており、お陰様にて順調に教育研究支援を進めて参ることができ、心から感謝を申し上げます。こうしたご厚意に報いるべく、寄付者に奨学金を授与した学生の抱負等を直接お届けしたいとの思いから、2021年12月11日（土）の奨学金授与式にご招待し、その後引き続いて、名古屋校舎研究棟20階M2001教室において、感謝状贈呈式と感謝の集いを開催しました。

【感謝状贈呈】（法人）株式会社 フューチャーイン様、株式会社 Re・lation様　（個人）久里　和英様

◆ 同窓会会長・後援会会長ごあいさつ ◆

愛知大学 同窓会会長　土井 義昭

profile

土井 義昭

愛知県豊川市在住
昭和35年3月 愛知大学法経学部
経済学科を卒業
昭和47年7月 宇都宮工業株式会社
代表取締役社長に就任、
平成28年6月より取締役会長に
就任し、現在に至る。
平成25年11月 ユーティーケー株式会社 代表取締役会長（現相談役）、同窓会活動としては、豊川支部支部長、同窓会（本部）副会長を務めた後、平成26年11月より同窓会会長に就任、4期8年を経て現在に至る。この間、愛知県私立大学同窓会連合会会長を歴任、平成28年6月より（公財）愛知大学教育研究支援財団理事（現職）

愛知大学同窓会は、2022年に設立70周年を迎え、15万人を超える同窓生が社会の構成員として様々な分野で活躍してきました。現在の会員数は約9万5千人程ですが、同窓会活動の拠点は地域ごとに区分する支部と、属性別にグループ化した部会により構成され、それぞれの単位で会員相互の親睦が図られています。これは同窓会の主な目的とするところですが、あと1つの大きな目的は、愛知大学の隆昌発展に寄与することであります。同窓会の組織力を生かして、側面からの様々な支援を行っております。記憶に新しいところでは、一昨年の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により大学の教育研究の環境が損なわれ、学生に至っては家計支持者の収入激減や、アルバイト収入減少等で修学の継続が難しくなる事例が伺われましたが、これらの対応策として大学が緊急経済支援制度を創設し、「新型コロナウイルス感染症対策緊急募金」として対外的に協力要請が公示されました。同窓会ではいち早くこれに応じ、会員に対して協力の呼び掛けを行った結果、多くの金額を集めることができました。これは応急的な支援ですが、恒常的な大学への財政支援として、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団（以下、「公益財団」）への寄付により教育研究活動への有効活用を推し進めています。

その中で代表的な奨学金として「知を愛する奨学金」があります。これは、勉学意欲の高い東海四県以外の高等学校出身者を全国から募集し、一般入試を受験・合格し、愛知大学に入学した学生を対象に奨学金を給付するものです。全国から優秀な学生を集めることによりブランド力を高めたいとの思いから、各地域の同窓生による高校訪問が盛んに行われています。

愛知大学の「第5次基本構想」において、「学生のキャリア開発・形成支援」が重点項目に掲げられています。公益財団は従来から「キャリア教育事業助成金」として就職プログラム実施のための支援を行っており、同窓会は学生・新卒者が参画するキャリア・アドバイザー制度「Ai-CONNEX」（アイ・コネクス）への組織的な連携を図っています。

今後も「物心両面」による支援の象徴として、愛知大学同窓会は公益財団を通して大学を支えて行きたいと考えております。

愛知大学 後援会会長　武山 卓史

profile

武山 卓史

平成5年3月　南山大学法学部法学科　卒業
平成7年3月　愛知大学大学院法学研究科
修士課程　修了
平成8年3月　愛知大学大学院経営学研究科
修士課程　修了
平成11年5月　税理士登録、
以後武山卓史税理士事務所
令和3年6月より後援会会長に就任、令和3年6月より（公財）愛知大学教育研究支援財団理事（現職）

日頃から公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」の活動に多大なるご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。また、後援会活動に対しても様々なご支援をいただき、ありがとうございます。あらためて厚く御礼申し上げます。

愛知大学後援会は1953年（昭和28年）に発足し、以来、在学生の父母である会員との連絡を密にし、相互の理解と協力を深め、愛知大学学則において大学全体の目的を「高い教養と専門的職能教育を施し、ひろく国際的視野を持って人類社会の発展に貢献しうる人材を養成すること」に資するために、大学の教育向上と学生の福祉増進に資するとの本会の設立目的を常に念頭におき各種事業を実施しております。

2012年（平成24年）に設立された公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」は後援会と同窓会がそれぞれに行ってきた奨学金寄付事業などを一本化し、愛知大学及び愛知大学生、愛知大学生OBの支援を行っています。現在は奨学金給付に留まらず、学術研究補助、課外活動支援、キャリア形成支援など多岐に亘って支援を展開しています。このような積極的な活動を推進できますのも、趣旨にご理解、ご賛同をいただいた後援会、同窓会はじめ、広く一般企業、個人の方からのご厚情の賜物です。

一昨年からの新型コロナウイルス感染症拡大による影響を含め、社会を取り巻く環境は刻々と変化をしています。決して先行きの明るいことばかりではありません。しかし、私たちは今後の日本経済を牽引し社会を担う若者を育てていかなければなりません。大学の掲げる「自立・自走する力」を養わなければなりません。大学内で学ぶべきことは学内での授業だけではなく、所属ゼミでの課題での研究、クラブ・サークル活動、ボランティア活動など目を外に向け吸収すべきことは数多く存在します。グローバル化が進む中、ひとつでも多くの経験を重ねることが可能性を広げ、未来への第一歩となります。

愛知大学には約9,700名の学生が在学し、約15万人余の同窓生が社会で活躍しています。このネットワークが今後拡大することにより、現役生と卒業生との繋がりも密になり、学内、学外での活動の場はさらに広がります。

今後、財団が果たすべき役割も増え、支援の場も広がります。私も後援会長として、また同窓生として少しでも役立てる活動をしていきます。同窓会の皆様にはこれからも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

寄附金名簿

※(順不同・敬称略)

◆法人

愛知大学後援会
愛知大学同窓会
愛知リーガルクリニック法律事務所
株式会社　アシスト
宇都宮工業株式会社
株式会社うぼん
株式会社えびせんべいの里
株式会社　ガード・リサーチ
木村産業有限会社
CANホールディングス株式会社
近畿日本ツーリスト株式会社
株式会社クイックス
ジャニス工業株式会社
西濃運輸株式会社
デュプロ販売株式会社
税理士法人　東海浜松会計事務所
トーテックフロンティア株式会社
トクデンコスモ株式会社
トヨタカローラ名古屋株式会社
名古屋トヨペット株式会社
日本音楽出版株式会社
(株)ナショナルメンテナンス
ネッツトヨタ東海株式会社
株式会社　日笠会計
藤岡倉庫株式会社
有限会社　フジパッケージ
株式会社フューチャーイン
公益財団法人　古川知足会
株式会社　ベストライフ
株式会社　マルホ
明治電機工業株式会社
株式会社　名大社
ユーティーケー工業株式会社
株式会社　Re・lation

◆個人

青野吉伸
足立光則
荒木仁子
有森茂生
石川光男
伊藤広済
稲垣信行
岩田喜久
内山隆司
遠藤精基
岡村幹吉
加藤孝雄
加藤春雄
加藤満憲
岸田充広
國島芳明
熊谷友佳理
栗原裕
甲村洋子
小林進之輔
酒井強次
酒井美代子
佐藤隆子
下和田恵男
庄田元久
菅野隆
菅原宜彦
杉本みさ紀
鈴木孝一
鈴木智
高木守
竹島良祐
竹島まこと
武田秀則
多田譲
土井義昭
唐啓山
鳥越剛
中島寛司
那須國宏
西川米子
橋本正洋
土師幸夫
長谷川勲
長谷川信義
林一義
林昇平
林行孝
速水利行
久里和英
平井治彦
廣重美和子
福田豊
藤井千恵子
藤井明雄
藤岡勢理
二村友佳子
堀田正二
堀田久富
堀木ヒロミ
松井淳子
松下真由美
松野博美
森繁美
安井健治
安井博子
山崎恵子
山田功
山本薫
吉井忠
脇水達生
和田信敏
湯山義則

皆様からお寄せいただいた温かいご支援に心よりお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

※本財団に寄附した年会費及び寄附金は、法人税・所得税の優遇の対象となります。(詳しくは、税務署へお問い合わせください)

Column

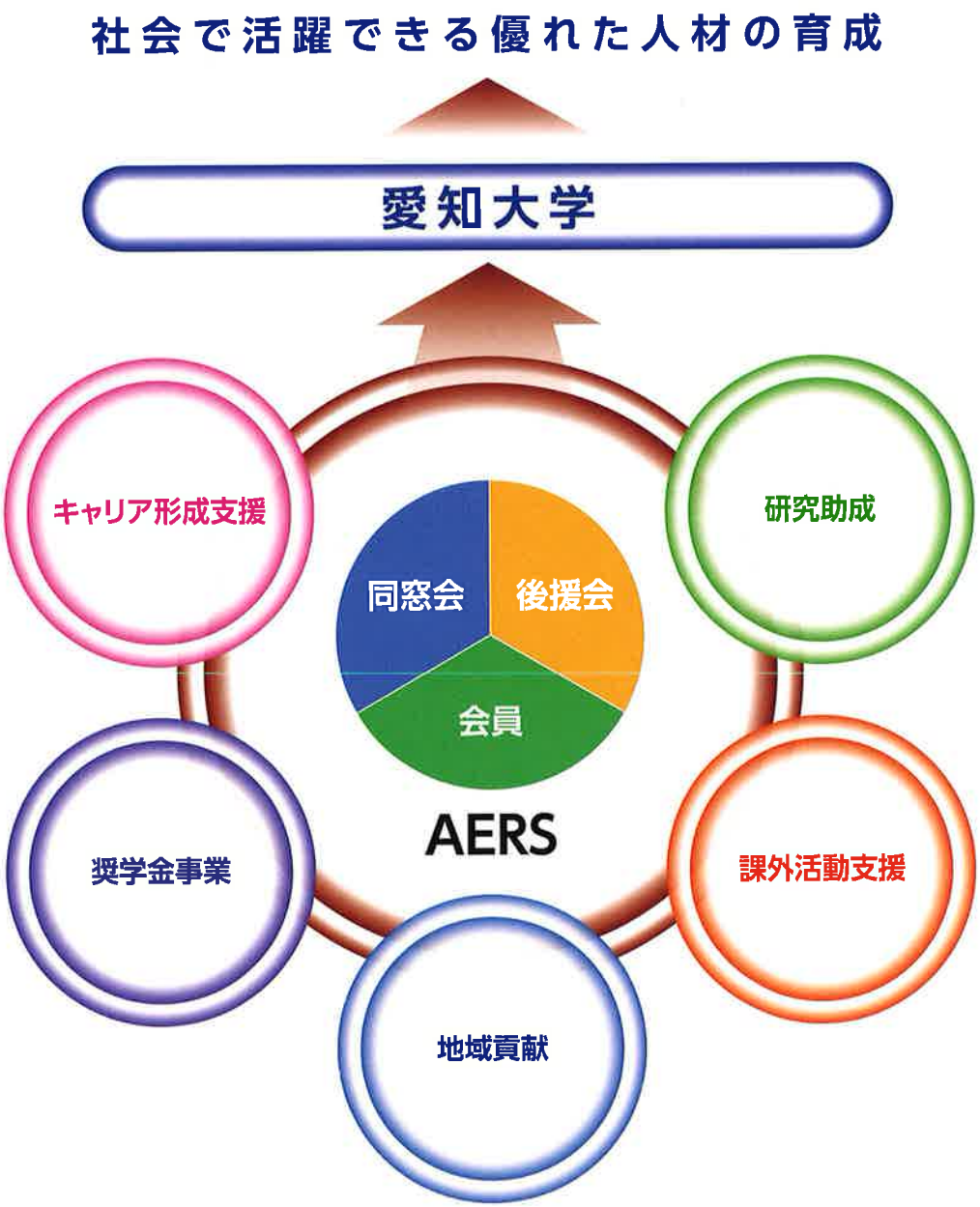
應援團の熱田神宮へのエール奉納

2022年2月11日、熱田神宮において、應援團のエール奉納が行われました。このエール奉納は、愛知大学應援團が毎年行っており、大変歴史があります。應援團の団員入部が続かず、消滅の危機に瀕しているのが非常に残念です。この日は、應援團OBからの応援はもちろんのこと、一般参拝の方からも足を止めての拍手がありました。

2012年11月、より地域社会に貢献する人材の育成を重視した財団として、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」を設立いたしました。本財団は、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実、不特定多数の利益の増進に寄与するための事業を実施しています。ひとりでも多くの研究者や学生、ひとつでも多くの事業に助成が活かされることを願って、幅広く応募の機会を開いています。これらの事業は、同窓会費・後援会費を始め、広く一般企業・個人の皆様の会費・寄附を貴重な原資としております。今後ともの活動にご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

■財団の基本情報

名称	公益財団法人愛知大学教育研究支援財団
設立日	1965(昭和40)年9月7日(財団法人 愛知大学同友会)
移行日	2012(平成24)年11月1日
代表者	理事長　加藤満憲
事務局	〒461-8641　名古屋市東区筒井2-10-31
電話番号	(052)937-8156
FAX	(052)937-8157
e-mail	kouyu@aichi-u.ac.jp
ホームページ	http://www.aichi-u.ac.jp/aers



知で活きる人へ。

公益財団法人愛知大学
教育研究支援財団

AERS

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

制作・印刷：大日本印刷株式会社